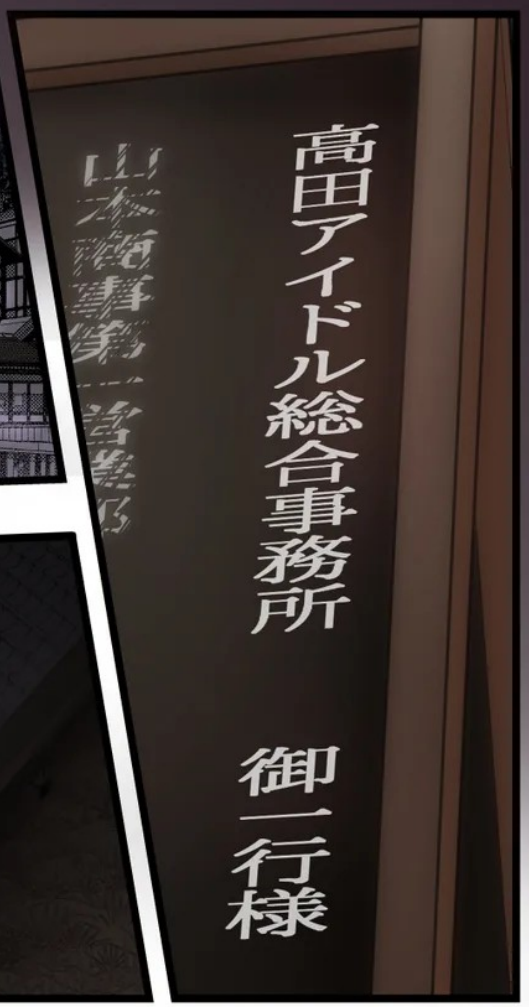
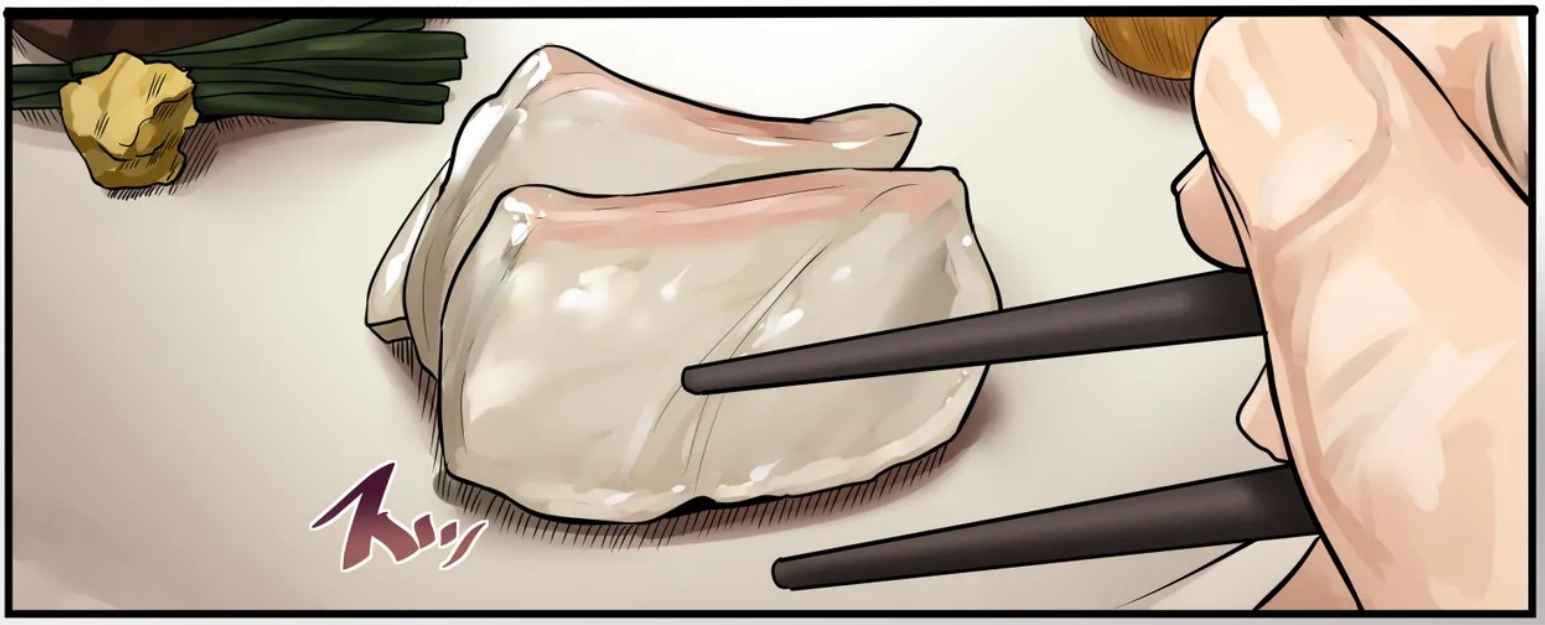
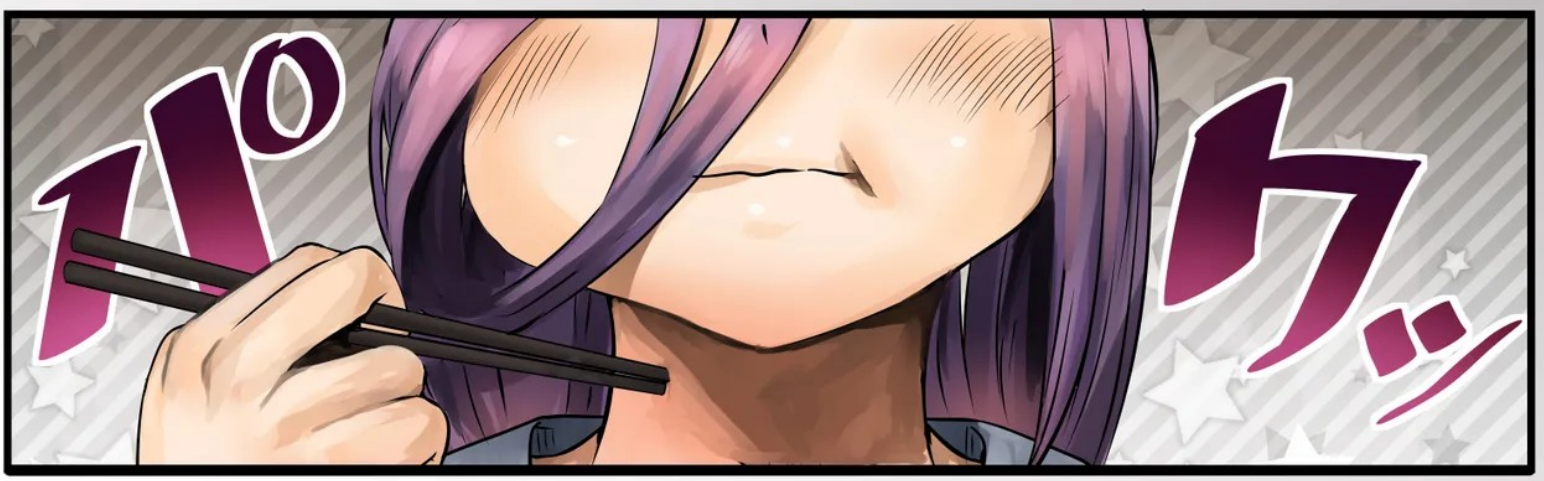
アイドル×マネージャー
かわいい系大人気アイドル、
脱いでみたら実は剛毛だった件！
受精パート！
かわいい顔して毛がすごい！
温泉っ生ハメっ生中出しっ
フルカラー漫画パート 29P
CG形式作品パート 11P+差分


高田アイドル総合事務所
御一行様

ワィ
ガヤ
ワィ
ガヤ


スッ


パ
クッ

うまい・・・！
ふぁ～ぁ
モグ
モグ
モグ
あの・・神崎さん そろそろやめたほうが
キッ
キッ
・・・ッ
モキュ
モキュ
あのっ
もーッ！今食べてるっ

ドーン

モグ

モグ

おかわりっ
お願いします！

すげぇなぁ神崎さん
大食いアイドルって
ほとんどやらせだと
おもってたよ・・・

最初は俺も
そうだったよ
それに神崎さんは

かわいい顔して
あれだからなぁ
マネージャーの
茂久田は大変だろう

はぁ・・・
はぁ・・・
ビクッ
うぷっ・・・
もうムリ・・・食べらんない

だから言ったじゃないですか
食べ過ぎないでくださいって
ご・・・ごめん
ん・・・
そ・・・それに着物はちゃんと着てください
みんなにジロジロ見られてましたよっ
えぇ〜一番ジロジロ見てたのはもっくんのような気がするけど
あれなんでしょ・・・？私のおっぱいみて興奮してたんでしょ〜？
もっくんの変態ぃ〜わたしアイドルだょっ！
なっなな・・・なにバカなこと言ってんすかそそ・・そんなことないですよっ！
み・・水持ってくるんでちゃんとおとなしくしていてくださいよっ

スルッ

ヨイショ

ガクッ
あっ

!!

スリュン

ドーン
あっ！
ドキ
ドキ
ドキ

す・すいません
神崎さん
わざとじゃ・・・

・・・

ドキ
ドキ
ドキ

いいよ・・・ッ
もっくんとなら

えっ・・・
な・何がです？

だ・だから・・・
あの・・・えっ・・・
エッチしても

はーっ
はーっ

いいよって
いってるの！

えぇっ！

で・・・でも僕たちは
マネージャーと
アイドルの関係で・・・

ギュッ

もうっ！
うだうだ言ってないで

はーっ
はーっ

私を抱きなさいよっ！

こっ・・・
後悔しても・・・
はーっ
はー
知りませんよっ

そんなの
するわけ・・・
ないじゃんっ！

もっくん・・・
ハァ
ハァ
キスしよ
ドキ
ドキ
スッ
ギュッ

好きだよっ
！！
チュッ
ん♡
はむっ
チュッ
チュッ
チュッ
ビクッ
ビクッ
んっ
んっ♡
はっんっ
んっ♡
ニュッ
ニュッ
はっ
はっ
ドゴッ
ドゴッ

あんっ
ジュワ〜〜〜…
んっ
んっ
ビク
ビク
はんっ
ビク
ビク
ビク
うんっ
んんっ
ビク
ビク
はーっ
はーっ
ちゅぱ
ちゅぱ
ちゅぱ
うっ
んっ
んっく

ハッ
ハッ
ハッ
はぁっ
はぁっ
はぁっ
はーっ
はーっ
パサッ
パサッ

あっあぁっ
やんっ
あぁそこっ
きもちぃい
んっ・・・あ

ズヌヌヌ

ヌ
プシッ

あっ
あっはぁ
んっ
もっくん
チューっ・・

ヌチャ
ヌチャ
ヌチャ

ヌチュ
んっ
ガシッ

ヌチュ
ヌチュ
ヌチュ

はぁ
はーっ
はーっ
いいっ
キモチッイイッ
ニュプ
ニュプ
ニュプ
チュプ
チュプ
チュプ
あっ
ワキっ…
ハーッ
ドロッ
ペチュ
ペチュ

あんっ
クッ
イクッ
あっ
チュパ
ヌプ
ヌプ
ビク
ビク
もっくん
ワキフェチでしょ・・・
どう・・？
はーっ
はーっ
えぇ・・
す・・・すごく
いいワキです
ガ
イッ
そ・・そうでしょ
わざわざ
生やしたんだから
クリ

で・・でも どうして そんなこと

知ってるんですか？

バッバカッ！！

そ・・・ それは・・・

数か月前

控え室 神崎 様

それじゃあ お疲れ様でーす

はぁ・・・ 今日も疲れた

んっ・・・ あれは・・・ もっくんの

たくっ・・・

マネージャーが これじゃあねぇ

こっ・・・ これ・・・っ

今日の厳選依動画 リンクはこちら←

かっ・・勝手に携帯 見たって言える わけないじゃない

その・・・

どうしました・・？
だ・・・大丈夫ですか？
はーっ
はーっ
だ・・大丈夫だから・・・
さっさと奥まで挿入れなさいよっ
ビクッ
ビクッ
はっ・・はいそれじゃあ
あっ・・
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ズヌ・・・
ゲイッ
んぁ・・・
はぁ
はぁ

クチチチ…
あっ
はぁっ
ズプンッ
んあっんうっ
つぅ・・！

痛いですか
もしかして・・・
神崎さんって
しょ・・

だ・・大丈夫っ！

はぁ

はぁ

ビク

ビク

大丈夫だから

はーっ

ギュ

もっと奥で
感じさせて

ドイッ

ツー

わっ!!

わかりました
神崎さん・・・

しゃぶっ
あんっ
あっ
チュプ
プチュ
プチュ
パン
パン
パン
パン
あぁっ
ズプ
ズプ
ズプ
ズプ

ビク
ビク
ヤバッ
あっん
チュプ
チュプ
チュプ..
はぁ
はぁ
ふぅはっ
ペロ
チュプ
チュプ
チュプ

あぁっ…なんかおしっこでちゃいそう
あんっ
はぁ
はぁ
やっ
あんっ
はぁんっ
これって中イキってやつじゃ…

ちょっと体位を変えます
えっ・・・？
はーっ
はーっ
ビク
ビク
ちょ・・・ちょっと
はあ
ぐぷ
んっっ
深いっ！
ビク
ズ
ムニ

ギチッ
ギチッ
ギチ
ブルルル
ズプン
子宮ノックされるのやばいっ！すげぇ気持ちいい
はーっ
ヌプ
ヌプ
これがセックス…
オナニーと全然違うイキそう…
はぁ

あっ
やん
ソコ
ア
ア
ア
ア
ビク
ビク

ハァ〜ッ
はぁ〜
ドピュルルルル
ドカッ
ドク

ゴッ
ポッ
あぅ
あっ
はーっ
はーっ
んっ
ビク
ビク
ビク
ッ!

いい湯だったね～

はるかちゃんも入ればいいのに～

はるかちゃん具合どうっ？

ガラッ

!?

はっ

はっ

はっ

パン

パン

パン

あっ

龍宮寺さん

…

ちょっと～～～ッ
アンタたち何してんのッッ

い・・いや・・・
これは・・・

その・・・

神崎と茂久田の情事が
龍宮寺に目撃されてから一刻…
二人は大浴場へ向かうため、
別館へ歩みを進めていた

渡り廊下を歩く二人
酔っ払い客で騒々しい本館とは裏腹に
そこに他の客はいない

木造の渡り廊下からは広大な庭を見ることができ
微かな月明かりの下、ただ虫たちの鳴き声と
二人の話し声だけが聞こえるだけであった。

「ここの大浴場ってすっごい
お肌にいいらしいんだー
どぉ？もっくんも私と一緒に女湯入る？」
「いや…女湯に入るのは無理ですって！」
「えぇ～いいじゃん…絶対人いないよ！」

「いやそういう問題じゃないんで…」
「えぇ～はいろうよ～」
「もう何言ってんすか？犯罪ですよ！」
「週刊誌に記事でも書かれたらどうするんですか。
マジで芸能生活終わりですよ。」
「えーそれはやだなーー」

「いや、そんなこと言われても…
ほかのお客様に迷惑ですよ！
絶対に無理です。」
「…まっ私は芸能生活終わる
ようなことがあったら
もっ君に養ってもうおっかなー」
「もー何『冗談言ってんすか。
洒落にならないすっよ」
「へッへっへっごめんごめん」

「まっそれにしてもよかったですよ。
見られたのが竜宮寺さんで。」
「えっどうして？」
「あっもしかしてご存知ないですか？」
「意外ですね」
「もー何なのよ
教えてよー」

「絶対に絶対に秘密ですよ。
竜宮寺さんって…
実はうちの専務の息子さんと
付き合ってるですよ。」
「えぇーっ！」
「二人とも25歳で
気が合ったんでしょうねぇ」

「この前、竜宮寺さんの楽屋に
お昼を届けにいったんですが、
まぁその、ノックするのを忘れてて、
しかもちょうどお二人が・・・
致している途中でして・・・
まぁ今日の私たちと
同じような状況で・・・
それはまぁ
大変なことになりましたよ
お二人は絶対に
秘密にしてくれと・・」
「当然そのお願いを了承しましたけど」
「へぇーそんなことがあったんだぁ
マジでいい事聞いちゃったよ」

「ちょっちょっと絶対に言わないでくださいよ！
もし言ったら、
僕たちの関係もバラされちゃうんですから。
そうしたらまじで終わりですよ」
「神崎さんだけ
じゃなくて僕も
会社にいられなく
なっちゃうわけ
ですから。」
「ふ～ん」
「もー言わないでくださいよー」
「はっはっはっ大丈夫！
言わないよー」

あっ…あれ見て

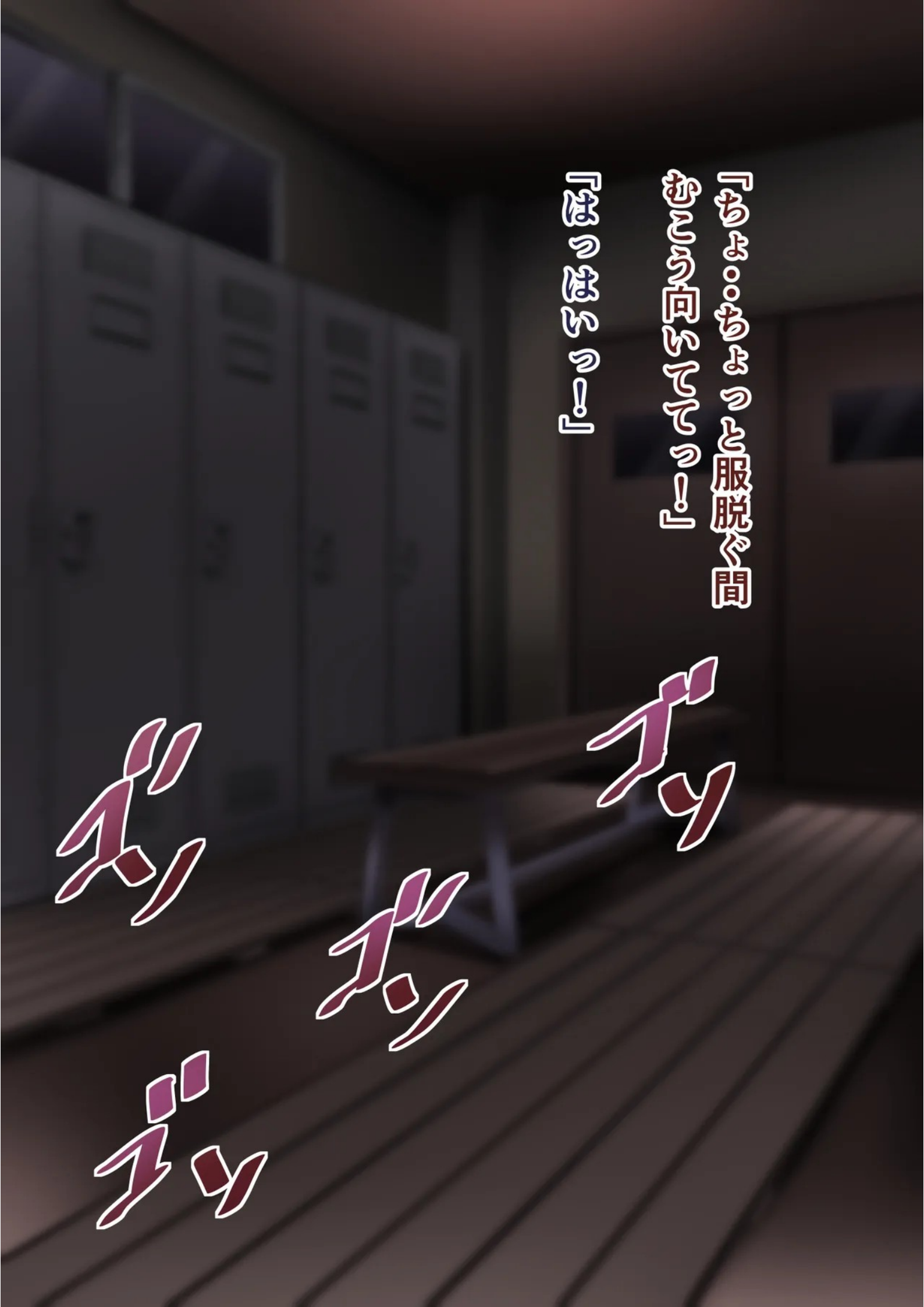
んっあれは…

家族
風呂
湯
ドン

家族風呂あるよ！
「あぁ…あれですかー
何でも宿泊者は無料で貸切利用できるらしいですよ。
使う場合はあの札を裏返して使用中にすればいいみたいですね」
「へぇーということはうちらはただで利用できるってこと？」
「まあそうなりますね」

「やった！
もっ君今からいこーよ」
「えぇッー？
家族風呂ですよ」
「ついさっき竜宮寺さんに
えらいとこ見られちゃったのに・・・」

「さっきのもっくんの理屈なら
大浴場じゃなくて家族風呂なら
一緒にはいってくれるんでしょ？」
「えっ…そ…それは」
「さっ！早く早く！」
「ちょ…」


『ちょ・・ちょっと服脱ぐ間
むこう向いててっ！』
『はっはいっ！』
ブッ
ブッ
ブッ

『あっ…
じゅっ準備出来たよ』
『…』
ハァ
ハァ

「さっきまで積極的だったのに
すごい照れだしてる
じゃないですか！」
ハァ
ハァ
「やっ・・ちがっ・・違うし
もっ君が私のこと
ヤラシー目で見るから・・・」

そりゃあ…見ますよー…
僕もおとこですし…
もっ君の…えっち…
!?
ハァ
ハァ

『そっそっそれじゃあ
そろそろ行きましょうか』
『う・・うん』
ハァ
ハァ

茂久田の下半身はむくむくむくっと
膨らみテント状になり、
はるかの下半身はねっとりとした
粘液が股をツーっとつたい
ぐっしょりと濡れていた
ハァ
ハァ

ド

おぉー
すごっ！
広いっ！
おぉっ家族風呂に
してはかなり
広いですねー

ここも大浴場と同じく
美肌の湯らしくて、
お肌にいいらしいですよ
へぇじゃあ
1日中入らなきゃね

そんなに
入ってたらしわしわに
ふやけちゃいますよ！
アイドル失格です！
なんだってー！

ほら、風邪ひいちゃいますよ
さっさと入りましょう！
うん！

カポーン
いやーいい湯だねー
はっはい
そうですね
すごく…いい湯…です
ドキ
ドキ

はるかさんの胸…すごい
さっき揉みしだいたのに…
全然足りない…
もっとあのやわらかい…
ましゅまろおっぱいに
むしゃぶりつきたいっ！

どーしたの？
わたしのこと
じっと見て
い・・いえ
なんでも・・・

もっくん…
わたしのおっぱいジッと見てる…
さっきから股間のふくらみ
バレバレだけど隠してるし…
もっくんのえっち～
興奮してるだ…
やば…わたしも…
またえっちしたく
なってきちゃった…

あっあのねもっくん…
お…おちんちん勃起してる??
えっっ!?
あっあの…その…
私の裸みて勃起してたの?
そっそれは…はっはい!
はぁ
はぁ
ドキ
ドキ

…いいよしても
この先も…
えっ…
いやその…
あの…
はぁ
はぁ
ドキ
ドキ

サワワ
サワ
はぁ
はぁ
ドキ
ドキ
パシャ
！！？
ビク

あっ…
かっ神崎さん…
はぁ
はぁ
ドキ
ドキ
もっ君っ…
キス…しよ！
スッ

ちゅ!!
ちゅっ…

はるかさんの舌
すげぇやわらかい
ん♡
ん♡
ん♡
ん♡
さっきは
気づかなかったけど
唾液…意外と
ねっとりしてる
えっちだ…

もっくん
のおちんちんが
あたってる
興奮してるんだ
んっ
んっ
んっ
舌も奥のほうまで
ねっとりと絡まれてる
なんか気持ち
よくなってきた

んっ…んんっ…
んっ
はむっ
んっ…
んっ…
んっ…
あんっ…んっ…
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

んっ♡
んっ♡
んっ♡
はあっ

ハァ
ハァ
もっ君
起ち上って…
えっ…？
早く…！

パクッ
あっ
ビク
ビクッ
ハァ
ハァ
かっ・・・
神崎さん
急に・・・
あっ・・・

あっ
んっ
んっ
んくっ
んくっ
チュパ
チュパ
はむっ

神崎さん
僕・・・もう・・・っ
はぁ
スポッ
スポッ
スポッ
んっ・・・
んっんんーよ
(イっていいよ)
スポ
スポ

ドクドクドク

す・・・すいません
すぐにイっちゃって

ハァ
ハァ

すっごい濃い・・・
もっくんっ！
まだ・・・できるよね？

ろりはあと

チャプ…

まだいけるよね
早く挿入れて
チャプ…
はっ…
はい！

ぱぷぱぷ
あっ…
んっ
あっ
おちんちん
膣内に
入ってきてる
あんっ…！
ぱぷぱぷ

そうつぶやいたはるかの
女性器からは愛液と先ほど
子宮に注がれた精液がツーと
糸を引いて零れ落ちた
あんっ
はんっ
んっ
より深く挿入すると
白濁した体液がぷちゅちちぃと
声を上げ、はるかは恥ずかしそうに赤面していた
ヌプッ

あっ!!
4ページ

ドロり
子宮の奥深くに
茂久田のちんぽが
突き刺さる
同時に子宮から
押し出された
愛液と精液が
どろりと溢れだした
茂久田は剥き出しの亀頭を
子宮口にこれでもかと
押し付けていた
ぐっ
ぐっ
あっ
んっ
はーっ

か…神崎さん
大丈夫ですか…？
いたく…ないです？

だ…だいじょぶ…
だから…も…もっと
もっと子宮の奥のほうを
おちんちんで
クニクニってしてっ

は…はいっ！

あっ…でも
やさしくっ…してね

ビクッ
ビクッ
ビクッ
ハァー
ハァー

んっあっ
あんあっ
はぁはぁあっ
ずぷ
ずぷ
ずぷ

やばっ神崎さん
すごい気持ちいです
腰止まりませんっ
うんっ
私もっ…
んっしゅごっ
奥っきもちいい
もっと
奥まで
突いてっ
あっ
あっ
あっ
あっ
ヌポ
ヌポ
ヌポ
ヌポ

あっ
あっ
あっ
あっ
パン
パン
パン
パン

神崎さんのおまんこっ
すごいですっ
奥のほうをギューっとつくと
子宮が痙攣してちんこを
求めてきてるのがよくわかりますっ
なっ…
何…は…恥ずかしいこと…あっん
いっ…いってんのよ
そ…そんっあん…ことないっ
ズボ
ズボ
ズボ
ズボ

『ずるるるおっ』
子宮口付近まで挿入されたちんぽを
ゆっくりと膣口あたりまで引き抜いた
『…あっんっ』
同時に亀頭カリ部分で掻き出された
本気汁と精液がツゥっと温泉に零れ落ちる
ずるりゅ
『うわっすごいですっ…神崎さん
すごい本気汁でてますよ…』
『めっちゃ濡れてます…』

『もわぁ…』
精液と愛液が混ざった酸味感のある刺激臭が鼻をつく
マンコ入り口付近の抜けるか
抜けないかの微妙な位置で
小刻みなピストンを繰り返す…
『ぬぴゅ…ぬぴゅ…』
飛び散る愛液で茂久田の陰毛は
テカテカに照り輝いていたピンク色の膣はだらしなく
よだれをたれ、くぱっくぱっとちんぽを咥えて離さない
あっ…
んっ…
あっ
クポ
クポ
もわぁ

また膣内の奥の奥まで
ニューっと
ちんぽを挿入する
愛液で濡れに濡れたまんこは
実にスムーズにちんぽを
子宮口まで導いた
「んっ・・・また・・・奥まで・・きた」
「あっ・・・おしっこーーでちゃう」
「ほ・・ほんとですかっ」
「出しちゃってもいいですよっ」
「僕は気にしませんから」
「わ・・私は気にするんだよっ」
はーっ
はーっ

「んあぁ・・・あれ・・・でも」
「奥のほう突かれると・・
おしっこでそうな感じがするだけで・・・」
「んっ・・なんか・・でないっ・・」
「んっああっ」
茂久田のちんぽが
Gスポットを刺激するたび
尿ではなく愛液が
ぷしゅっぷしゅっと
噴きだしている
パン
パン
パン
パン
あっ
あっ
あっ

「はぁはぁ」
これが中イキってやつかな
ずっとキモチイイのが続いて
頭真っ白になっちゃう
おしっこ出そうなのに
全然でないし…
おかしくなっちゃったかもっ…
「んんっ…」
パン
パン
パン
あっ
あっ
あっ

愛液でヌルヌルになったちんぽが
Gスポット付近を連続で刺激する…
すると白濁した愛液がとろっと染み出し
きらりと光る体液の糸を形作る
『ぐちゅぐちゅぐちゅ』
次第にピストン音が淫靡な音に変化していく
その音がさらにふたりの気持ちを高め
より多くの粘液が分泌されるのであった
ズリュ
ズリュ
ズリュ
ズリュ

あっあっあっん
あんんんはぁぁ
んぐぐ
あぁぁ
パパパパ
ぐちゅっ

あぁっ・・この体位しゅごいっ
当たったことないところに
おちんちんがこつんこつんってしてるっ・・・！
きもちよしゅぎる・・んっ！
あっあぁ
ビク
ビク
ん、、、ト
「きゅう～～っ」
膣内の内側をこするたびに
強く膣内が収縮し、ちんぽを締め付ける

「僕もすげぇ気持ちいいですっ」
「突くたびに締め付けられて
すぐイっちゃいそうですっ」
「いいよっ一緒にイこっ」
あっあっ
ビク
ビク
ん♡ッ
「神崎さんっうれしいですっ」
「本当はこんなことしちゃだめなのに…」
「わたしは…全然したかったけど…ね」
「神崎…さんっ」

神崎さん愛してます
！？
あっ・・・
わ・・私も・・・
もっくんのこと・・・
愛してるっ！
パン
パン

神崎さん
もうイキますっ
うんっ…
膣内に…
膣内に濃ゆい精液
いっぱい出してっ！
はいっ！
パン
パン

ビクンビクン
ズクッ♥
ドクッ
ドクッ

あっ…
ぶてる
ビュルルル
ビクッ
ビクッ

んっ…！
あっあっあ
ドクポクポク
ビクビク

その後も二人は体位を変え
何度も、何度も愛し合い、子宮は精液で
パンパンになっていた…
はーっ
はーっ
汗だか温泉だかわからないほど
ぐちゃぐちゃになりながら、
ただ体を重ねるふたり…
すでに数時間たっていた
パン
パン
パン
パン
パン
パン
ビッ

あっ
はあっ
んっ
んっ
「パンパンパン」と
ピストン運動をするたびに
パンパンに膨れた膣内から
精液が漏れ出しくる
パン
パン
パン
水面には精液の花が
プカリと浮いていた

か…神崎さんすいません
また…イっちゃいます
な…膣内に出してもいいですか？
はぁ
あっ
ん♡
う…うんっ…！
また出して…っ
もっくんの精液で膣内
いっぱいにしてっ！

あっきもチイイ
はぁ
あんっ
あっ
んっ
あぁんあ
イグ
ヌポ
ヌポ
ヌポ
ヌポ
ヌポ

ムクッ
はぁ
あっ
んっ
ジュワァ
ドピュ
ドピュ

中出し後も二人は
満足することはなく何度も何度も子宮に
熱い精液を注ぎ込み獣のように情熱的に
はぁ
あっ
ん♡
パン
パン
パン
体を重ね合い温泉中が精液と
愛液の香で満ちても一晩中、温泉につかっては
セックスを繰り返していたのであった